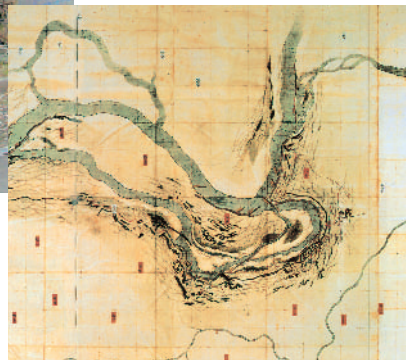




▲龍蔵堤



▲「村々沼川堰留之図」の一部 (国立国文学研究資料館所蔵)

背景

吉野川の第十堰の南側、徳島市国府町に芝原というところがあります。第十堰が造られる少し前、この辺りには一面に藍畑がひろがり、そこに住む人たちは、丹精込めて藍を作っていました。しかし、毎年のように吉野川が氾濫するので、家や牛馬は流され、せっかく耕した田畑も台なしになりました。そこで村の人々は人柱を立てて、堤を守ることを考えました。昔から人柱を立てると、川の怒りを鎮めることができると考えられていたのです。これは、庄屋さんへの恩返しのために、人柱になった龍蔵さんの話です。

アクセス

ほこら 祠と龍蔵堤

- 第十堰南岸より南へ直線距離約1 km
- 徳島市国府町芝原 竜王団地北東端
- 緯度経度 北緯34度05分52秒, 東経134度27分29秒



第十堰が造られる少し前の話です。村の世話役たちが、庄屋さんを囲んで、どうしたら頑丈な堤がつくれるかを相談していました。それまで輪の中で、腕組みをしたまま考え込んでいた庄屋さんが、こういいました。「もう、こうなったら、人柱を川に入れるよりしようがない」「誰を人柱にするんか?」「明日の朝、いちばんに通った者を、人柱にしよう」庄屋さんはきっぱりいいました。こうして、川に人柱を入れて、堤を作りなおすことが決まりました。

その夜、庄屋さんの妻は、庄屋さんから次のようにうちあけられました。

「人柱には、私になる。私かなれば、みんなのためになると思うとつたんじや。明日の朝いちばんに出かけるけん、白装束を用意してくれ。どうぞ、あとのことはくれぐれもよろしく頼む」

ところが、この二人の話を聞くとはなしに聞いていた人がいました。龍蔵です。龍蔵は、日頃から職も持たず、庄屋さんの家から食べ物も分けてもらって暮らしていました。「えらいことになったもんじや。庄屋はんが人柱になるんやって。あない偉い人を死なせたらあかん。わしが身代わりになる」

翌朝、村人たちが息をひそめて待っていると、白装束の遍路姿の男がやってきました。村人たちはいつせいにその男に飛びかかると、そのままかつき上げて、その男を川に投げ込みました。

すると、水音に混じって、男の声が聞こえてきました。

「庄屋はんによろしゅういうといて。龍蔵は喜んで身代わりになつたちゅうて」

ほどなくして、白装束に身を包んだ庄屋さんがやってきました。「龍蔵、礼を申すぞ。おまえの命はけつして無駄にはせん」こうしてできた堤防が「龍蔵堤」です。村人は近くに石の祠を建てて龍蔵をまつりました。この祠を「川贄さん」と呼んでいます。